

佐賀大学芸術地域デザイン学部

SMAART2020 ▲

# 美術と社会の時間

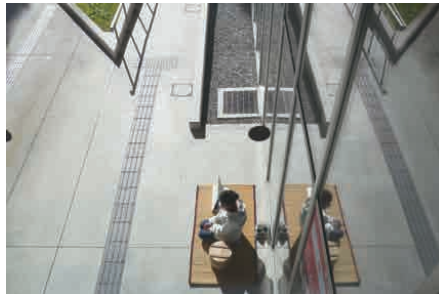
ART AND SOCIETY CLASS ▲



SMAART2020

# 美術と社会の時間

ART AND SOCIETY CLASS



## 目次

- 2 ごあいさつ
- 3 スケジュール

### 事前準備

- 5 オンラインミーティング
- 6 設営

### 展示作品

- 10 松尾匠
- 12 坂田空
- 14 カドベヤ(宇野のどか+川崎由梨子)
- 16 竹下綾香
- 18 石丸圭汰
- 20 江越未悠
- 22 SECOND PLANET(外田久雄+宮川敬一)

### 関連イベント

- 24 ワークショップ「いろいろいる」
- 25 鑑賞ワークショップ「アートがうまれるジカン」

- 26 作品解説
- 28 アーティストプロフィール
- 30 アンケート集計結果
- 31 WEB広報・メディア掲載
- 32 終わりに

### 凡例

展示作品のページに記載の情報は下記の通り

作品名 作品名 (英)

作者名 作者名 (英)

制作年 | 素材 (大きさ、映像の場合は長さ)

コンセプト

|

本記録集に掲載した文章の執筆者のイニシャルは下記の通り

小林愛恵 (MK)

別府菜々子 (NB)

安原彩絵 (SY)

穴瀬聖 (HA)

井上菜々子 (NI)

小河千夏 (CO)

水本真弓 (MM)



## ごあいさつ

SMAARTとは佐賀モバイル・アカデミー・オブ・アート (Saga Mobile Academy of ART) の略称であり、佐賀大学芸術地域デザイン学部が佐賀および周辺地域のアートマネジメント人材の育成を目指すプロジェクトとして、2017年度から3年間にわたり活動を行ってきました。

2020年度のSMAARTは、2019年度にSMAARTを受講したマネジメントを専攻する学生を中心に、アーティストらが地域で展開するアートプロジェクトを支え、その成果を集約した展覧会を佐賀大学美術館にて行いました。座学のみでは経験できない実践的な現場での活動や参加アーティストとの交流を通して、メンバーが各々の立ち位置を把握し、改めてアートマネジメントとは何かを考える機会となりました。

本展覧会を行うにあたり、今年8月から芸術地域デザイン学部及び地域デザイン研究科の表現を専攻する学生有志たちと、オンライン上でのミーティングを重ねました。今回、講師として迎えた福岡県在住の美術ユニットSECOND PLANET(外田久雄[1959-]+宮川敬一[1961-])のアドバイスをもとに、表現の学生たちはそれぞれのプロジェクトプランに磨きをかけていきます。その中で、表現の学生とマネジメントの学生が協働しながら作品制作と展覧会準備を進めていく運びとなりました。

このたびのコロナ禍の影響を受け私たちの生活が大きく変化した状況のもと、各々の視点から見た美術と社会との関係性から、どのような表現活動を行ったのかをぜひご覧ください。

「SMAART2020 美術と社会の時間」  
マネジメント学生代表

## スケジュール

2020年	マネジメントチーム	アーティストチーム
8月	8/19 (水) オンラインミーティング 企画概要説明会	8/23 (日) 出品者確定
9月	9/9 (水) オンラインミーティング 初期プラン提出 9/30 (水) オンラインミーティング プロジェクト実施のための方向性の確定	9月中旬～11月 アートプロジェクト実施・ 制作期間
10月	展覧会広報 10/12 (月) SNS 開設・広報開始 10/14 (木) 大学広報室へのプレスリリース作成 10/26 (月) 佐賀大学広報室 記者会見 10/21 (水) オンラインミーティング 実践したプロジェクトの報告	
11月	11/4 (水) 佐賀新聞取材 搬入・設営 11/10 (火) SECOND PLANET 11/13 (金) 学生アーティスト 会期 11/14 (土)、15 (日) 関連イベント 11/14 (土) ワークショップ「いろいろいる」 11/15 (日) 鑑賞ワークショップ「アートがうまれるジカン」 11/18日 (水) あおいるデザイン 江副哲哉氏によるデザインレクチャー 11月中旬～12月 記録集作成	11/15 (日) 搬出
12月		



事前準備

## オンラインミーティング



コロナ禍という社会状況を踏まえ、全体のミーティングは全てオンライン上(Cisco Webex)で行いました。2020年8月19日(水)、9月9日(水)、9月30日(水)、10月21日(水)の19~21時の間で学生アーティストたちは講師であるSECOND PLANET(美術家/外田久雄+宮川敬一)にアートプロジェクトのプランを提出してアドバイスを貰うなどし、それぞれで作品制作に取り組みました。



# 設 営



SECOND PLANET 搬入  
..... 11月10日(火)

学生アーティスト 搬入  
..... 11月13日(金)





## 展覧会情報

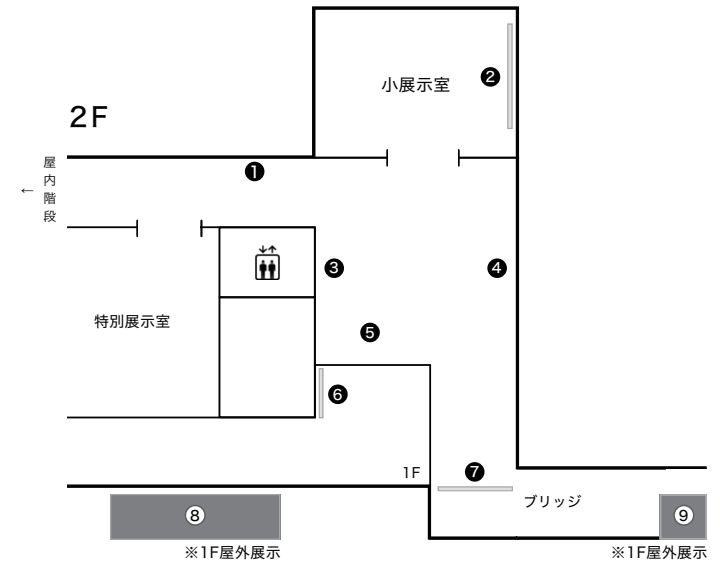
『SMAART2020 美術と社会の時間』

### 会期

2020年11月14日(土)～15日(日) 10:00～17:00 (15日は15:00まで)

### 会場

佐賀大学美術館 2階 小展示室



- |                      |       |                                       |               |
|----------------------|-------|---------------------------------------|---------------|
| ①② imageのび太 .....    | 松尾 匠  | ⑥ An Interview with Andy Warhol ..... | SECOND PLANET |
| ②③ 常在菌味噌コミュニティ ..... | 坂田 空  | ⑦ FORTUNETELLERS .....                | SECOND PLANET |
| ②④ 暴く花壇 .....        | カドベヤ  |                                       |               |
| ⑤ 131g .....         | 竹下 綾香 |                                       |               |
| ④ 接触 .....           | 石丸 圭汰 |                                       |               |
| ⑤ SPOT .....         | 江越 未悠 |                                       |               |

## 展示作品

# image のび太 image Nobita

2020 | 映像(11分46秒)、紙(29.7×21.0cm)

松尾 匠  
TAKUMI MATSUO



人と人が画像を介して行うコミュニケーションについて、既成イメージやそれを扱う行為を通して言及する。



# 常在菌味噌コミュニティ MISO Community

2020 | 映像(1分51秒)、パフォーマンス

坂田 空  
SORA SAKATA



古くから味噌作りでは、作り手の常在菌を入れることで、自分に合ったものにしてきた。今回は、味噌の中に参加者の常在菌を入れ、それを醸す。「味噌の中で、私たちは出会う」をコンセプトに、常在菌味噌コミュニティをつくる作品である。私たちはこの時代に、菌として味噌の中で出逢う。

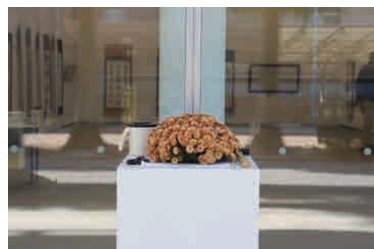




## 暴く花壇 expose flower bed

2020 | 映像(2分27秒)、インスタレーション

カドベヤ (宇野のどか+川崎由梨子)  
KADOBEYA (NODOKA UNO + YURIKO KAWASAKI)



人間が匿名という機能を使い社会に関わることで問題が生じる度、「匿名性という保証」や「社会における匿名性」のあり方について問われてきたと感じる。そこから私たちは「匿名とアート」をコンセプトとし、社会に当然として存在する「匿名性」とその意義をもう一度見つめ直す活動を考えた。



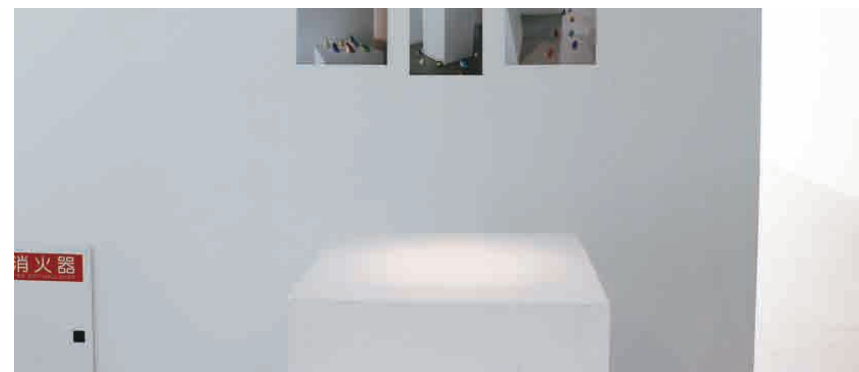
# 131g

2020 | インスタレーション

竹下 綾香  
AYAKA TAKESHITA



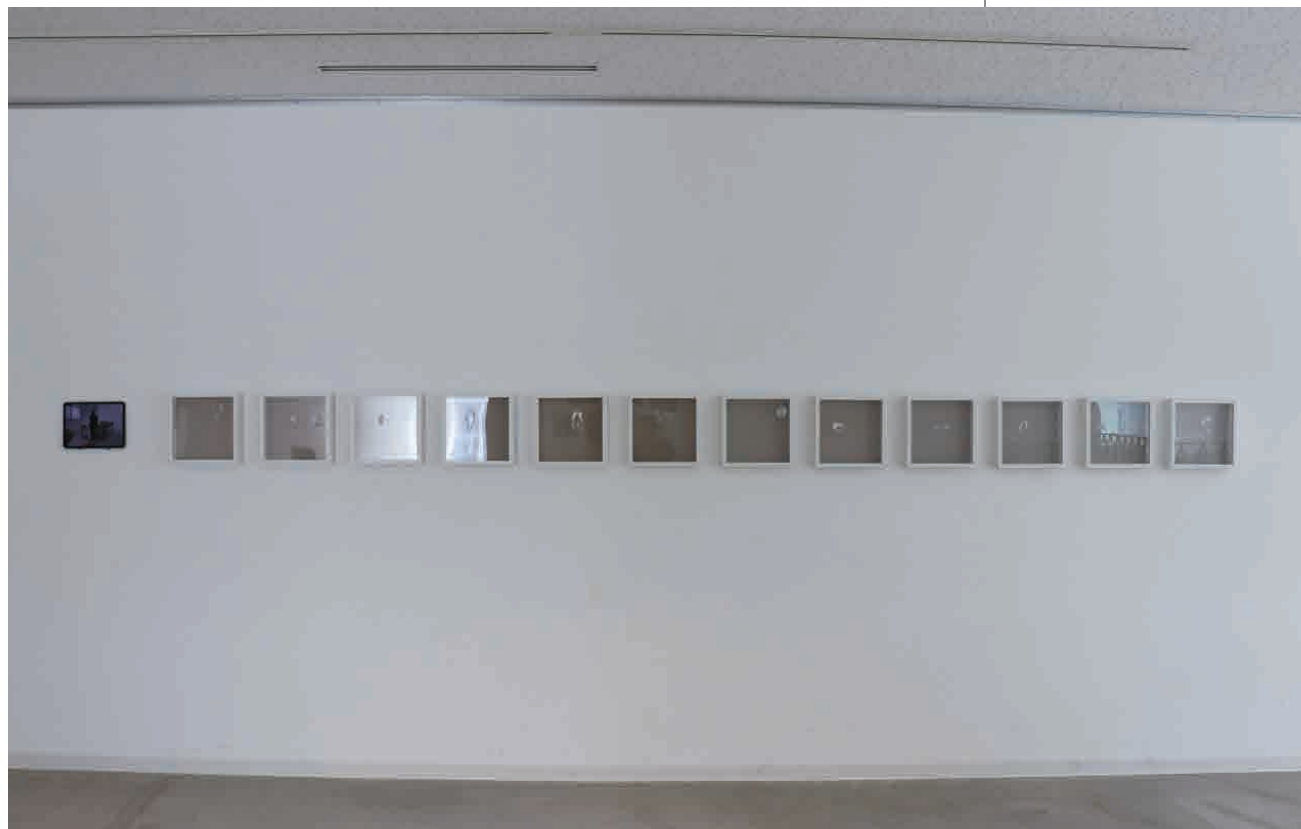
型を抜き取られ、中身を喪失した張り子は「気配」そのもののよう。《131g》はそんな張り子を用い「喪失と気配」をコンセプトとした作品だ。気配を「見る」という体験を通じて、いつもとは違った風景の感じ方を提示している。



## 接触 touch

2020 | 映像(25分34秒)、アクリル(25.0×25.0cm) 12点

石丸 圭汰  
KEITA ISHIMARU



最近、自分以外の誰かという存在がとても遠くなったように感じる。あんまり近くに居るとリスクがある現状もあってなのか。いや、遠くなったと言っても元々誰かが近くにいたのかもわからない。今回製作したこの作品では、対象に触れるという方法でその距離と間にある物達を探っている。

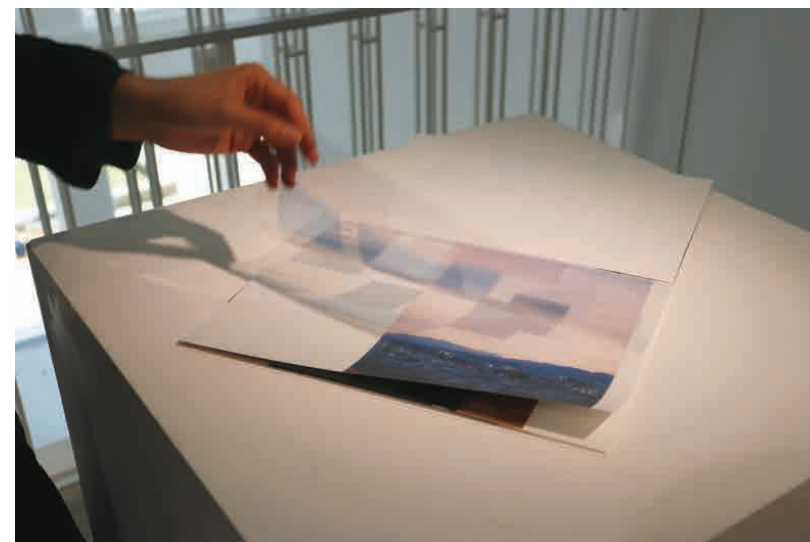
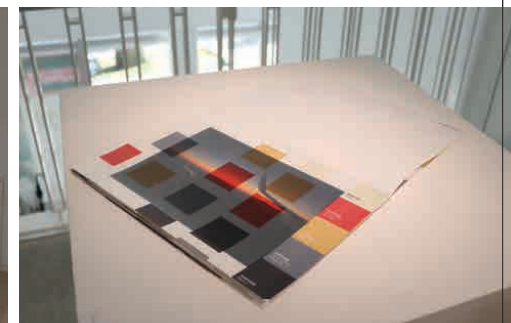


## SPOT

2020 | 写真(インクジェット、21.0×29.7cm)15点

江越 未悠  
MIYU EGOSHI

「5色だけ選んでいいよ。」と言われたら、何色を選ぶだろうか。プロジェクトでは「色」というごくありふれた、同時に、大切でもある要素に注目し、色を抽出するという体験をする。普段何気なく見ている景色や、思い入れのある写真から選ばれた「色」のパレットを集めた。





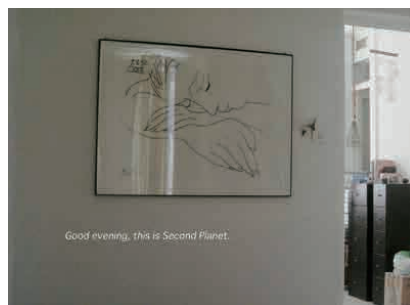
## An Interview with Andy Warhol

2006 | 映像(5分44秒)

### SECOND PLANET (外田久雄+宮川敬一)

HISAO SOTODA + KEIICHI MIYAGAWA

日本の女性のチャネラーに、1987年2月22日に死亡したアンディ・ウォーホルにコンタクトを取ってもらい、死亡後の状況やアートの未来についてインタビューした作品。



## FORTUNETELLERS

2006 | 映像(15分38秒)

### SECOND PLANET (外田久雄+宮川敬一)

HISAO SOTODA + KEIICHI MIYAGAWA

協力 高木哲(東京)、岡本光博(那覇)、亀井岳(金沢)、イエスパー・アルバー(ブラハ)  
フィリップ・ホースト(ベルリン)、フューチャー・プロスペクツ(マニラ)



東京、那覇、金沢、ベルリン、ブラハ、マニラ、北九州に住む古い師に、美術館の未来について占ってもらったインタビュービデオ。これまで、北九州市立美術館、福岡市美術館、金沢21世紀美術館、広島市現代美術館を占ってもらい、それらのインタビューを各美術館で発表した。





## 関連イベント

### ワークショップ「いろいろ」

日時:2020年11月14日(土)13:00~15:00

会場:芸術地域デザイン学部1号館2階A101室

ゲスト:江越未悠(美術家/佐賀大学芸術地域デザイン学部)

ファシリテーター:水本真弓(佐賀大学芸術地域デザイン学部)

参加者数:8名

展覧会初日の11月14日、ワークショップ「いろいろ」が開催された。本展覧会出品作家の江越をゲストに迎え、江越の担当キュレーターでもある水本がファシリテーターとなり進化した。

今回の江越の出品作品である<SPOT>は、参加者にそれぞれお気に入りの写真を選んでもらい、そこからさらにPANTONE Studioというアプリを用いて抜き出してもらった5色を「色パレット」として収集するプロジェクトだ。ワークショップの前半では実際に同様の体験を行い、参加者それぞれ写真や色の選定理由について語り合った。後半は水本が準備した写真から色パレットを作る体験が行われた。全員同一の東京のにぎわう街並みをとらえた写真であったが、あえて彩度の低い色に着目した人、なぜ賑やかに見えるのか、その印象を与える色を探して抽出した人など、それぞれ大きく異なる取捨選択のポイントに驚かされる場面もあった。

この「色パレット」は1人でも作成し、完結できる。しかし他者と共有することで、疑問や相違点生まれ、他者や自己について認識を深めることができる。こういったワークショップがもつ機能についても考えさせられるイベントであった。(SY)



### 鑑賞ワークショップ「アートがうまれるジカン」

日時:2020年11月15日(日)13:00~15:00

会場:佐賀大学美術館横 カフェ跡地2階

ゲスト:宮川敬一(美術家/SECOND PLANET)

ファシリテーター:水本真弓(佐賀大学芸術地域デザイン学部)

参加者数:19名



8月半ばからオンラインミーティングを経て準備を進めてきた本展覧会であるが、ゲストアーティストであるSECOND PLANETの宮川氏と学生作家、担当キュレーターは、本ワークショップ「アートがうまれるジカン」にて初めての顔合わせとなった。水本がファシリテーターとなり、宮川氏やワークショップ参加者とのやり取りを取り持った。

前半は、宮川氏の話からSECOND PLANETの路上のプロジェクト、インスタレーション作品などこれまでの活動について振り返りかえった。特に本展でも展示した作品については参加者の感想を交えながらのやりとりが行われた。後半は、本展の学生作家のプロジェクトについて、ワークショップ参加者や担当キュレーターを交えながら意見交換が行われた。出品作家からは石丸、江越、坂田の3名の作家が参加し、それぞれ今回の展示に向けた作品を制作する上での社会との関わり方や表現方法について語った。展覧会準備はほとんどがオンラインでのやり取りであったが、展覧会鑑賞や本ワークショップを通して意見交換をすることで、対面ならではの良さと、オンラインを生かしたこれからの展覧会のあり方について考えさせられた。(HA)



## 作品解説

### ①② image のび太／松尾匠

本作は、日常の延長線上に存在する作品、あるいは、美術が自明ではない文脈で成立する作品から、松尾と社会の関係について考える実験的なものである。

松尾は既存の美術の枠組みに疑問を感じていた。そこで、自分と美術の関わりを見つめ直した結果、アニメキャラクターのイメージを扱う今回のようなアプローチに至った。そのため本作では『ドラえもん』のキャラクター「野比のび太」の画像を使用している。彼はこれを、インターネット上の他人がイメージを無断使用して起こるコミュニケーションに重ね、そこから起きるリスクや偶然を見出そうとしている。

「野比のび太」の画像を公開した空間では、偶然居合わせた人たちに様々な影響を与えた。本作の行為はインターネット上では認知度が高いものの、現実世界ではほぼ行われぬ。そのためゲリラの側面が強調され、人の内面や常識がより引き出されたのではないだろうかと筆者は考える。(NI)

### ②③ 常在菌味噌コミュニティ／坂田空

味噌樽に醸造前の自家製味噌を入れ、そこに不特定多数の人間の常在菌を入れて発酵させ、味噌を完成させるという作品である。

坂田は、現在世界中で猛威をふるう新型コロナウイルス感染拡大防止のために、人々が過剰に菌やウイルスを排除しようとする動きに疑問を呈している。そのような、過度な除菌を強いられる時代において、あえて「菌を集める」という行為を行ったのが本作である。

人間の手に存在する常在菌は一人ひとり違い、古くから日本の家庭で行われてきた味噌作りでは、その個性ある常在菌が入ることで、それぞれの家庭に合う味になっていたと言われている。

作家自身が大豆を5時間煮込み、それをよく潰し、塩と米麴を混ぜて作った醸造前の味噌を樽の中に入れ、それを担いで見知らぬ人に声をかけ、味噌の中に常在菌を提供してもらっている。提供された常在菌は不特定多数の人の常在菌と出会い、味噌の中で新たなコミュニティを形成していくのである。

見えないものを見えないからこと過剰に恐れてしまう今日において、見えないものを見えないまま集めた本作は、本来私たち人間が様々な菌に適度に触

れながら、共存、共生、共榮してきたことを再認識させてくれるのではないだろうか。(CO)

### ②④ 暴く花壇／カドベヤ

現代社会、「匿名」という選択肢はプライバシーを保護するという目的のもと、多くの場面で人々に提示されてきた。同時にこの機能は自分の言動に対する責任を追及される危険性がない保証となる側面も持つ。今回初の共同制作となるカドベヤの二人は、現実世界を引き出す試みを行うことで社会における「匿名」のあり方を問うている。

《暴く花壇》は、通行人から路上に設置した花への行動履歴を観察するものであり、駅や大学・公園など日毎に場所を変え、4日間に渡り行われた。参加者の行動に責任を問わないという条件で、じょうろの他にハンマーや鉄などの道具も設置された。結果として、花を傷つける行為が見られたのは少数で、装置を見るだけに止まり行動を起こさず立ち去る人が大多数を占めた。また、装置は期間中高さや見た目の改良を加えながら3回形を変化させており、二人の試行錯誤の様子が見て取れる。目に見える痕跡としての結果は残らなかったがこの作品が示す結果は、生きている相手の顔が見えないネットと、表情や感情が資格の情報として直接入ってくる現実との差異を想起させる。(NB)

### ④ 131g／竹下綾香

作者である竹下は、環境とモノが与え合う相互作用について関心を寄せていた。本作ではそこに、作者がコロナ禍による街の変化を受けて生まれた気づきに加えられている。

7色の張り子は形も不揃いで、それが鳥なのか、石なのか、はたまた全く異なる別の存在なのか、私たち鑑賞者に多様な存在を想起させる。《131g》において、張り子は多様な存在の代理であり、「気配」そのものと言えるだろう。写真に収められている風景は、この展示室を訪れるまでに恐らくすべての人が視界に入れた場所だ。美術館を後にし再びその風景を目にしたとき、鑑賞者は作者の気づきを追体験することができる。(SY)

### ④ 接触／石丸圭汰

並べられたアクリル板には様々な模様が描かれている。映像をみることで、描かれたひとつひとつの模様が何をあらわしているのかを理解することができる。対象をふちどり、描かれたときの距離から生まれる絵具の揺らぎは、ふちどられた人物それぞれの個性とも受け取れる。作者はこの作品を通して、対象に触れることと、対象との距離やその間にメディアが介入していることを視覚的に表現しようと試みる。アクリル板に浮かび上がった輪郭は、作者が「触れる」という行為をおこなった確かな痕跡であり、コロナ禍という私たちの新たな日常の中にも、対象との間に様々なメディアが介入されている事を思い出させる。(HA)

### ⑤ SPOT／江越未悠

本作は、人の感性によって選ばれる色がテーマである。制作者の江越は、人の見え方・感じ方の違いから生まれるおもしろさを制作活動の軸としており、今回のプロジェクトでは、参加者へお気に入りの写真を選ぶこと、写真から色を取り出すことをPANTONEのアプリを使ってしてもらい、それらを「色パレット」と称し、集める。参加者は、自分が選んだ写真から色だけを切り取ることで、その写真にとって大切とされる要素に気づく。また、他にも「こんな色があったのか」と発見し、色パレットは人の感性さながら多様化していく。取り組みの一つとして、江越は色パレットをInstagramに公開、ハッシュタグ機能を使った共有を参加者に促している。これにより、いつだれがどこにいてもプロジェクトに参加できる。コロナ禍の影響で人と人が密にコミュニケーションを取ることが難しくなった今の世界の状況を踏まえて、私たちの生活の一部となっている「SNS」と「アート」の可能性に目を向けた実験である。参加者のみならず、他者によって作り出された色パレットを鑑賞者として見たとき、色を選んだ本人とは違う色に注目したり、同じ色でも全く違う想像を膨らませる体験をすることもこの作品の醍醐味である。(MM)

### ⑥ An Interview with Andy Warhol／SECOND PLANET

チャネラーとはこの世にない霊的な存在を自身の内に降ろし、交信を行う人のことである。この作品はそんなチャネラーを介して1960年代頃にアメリカで起こった芸術運動であるポップ・アートの先導者、アンディ・ウォーホル(Andy Warhol,1928-1987)を天国から呼び出し、作者がいくつかの質問を投げかける。

映像は古郷卓司(1965-)というアーティストと協同し制作された。

この作品はウォーホルの作品と似た性質を持っている。ウォーホルの作品は既存の写真というオリジナルをコピーし、そのコピーを使用して増殖的に同じものを生産する映し合わせの鏡のような反復性をもつコピー、シミュラクルを作り出した。

それを踏まえれば、この作品のインタビューでは、ウォーホルというオリジナルと対話をしているのではなく、チャネラーというウォーホルに限りなく近い存在、コピーと対話しているとも解釈できる。また映像に関しても、短い時間で切り取られた同じ映像が繰り返し再生されている点や、映像に映る絵画(パブロ・ピカソ『戦争と平和』1952年)も複製画である点は反復性やコピーといったウォーホルの片鱗を感じさせる。(MK)

### ⑦ FORTUNETELLERS／SECOND PLANET

協力/高木哲(東京)、岡本光博(那覇)、亀井岳(金沢)、イエスパー・アルバー(プラハ)、フィリップ・ホースト(ベルリン)、フューチャー・プロスペクト(マニラ)

作者は世界各地の占い師に美術館を占ってもらおうべく、各地に住むアーティストや関係者に依頼して占ってもらった様子を撮影してもらい、その映像を翻訳・編集した。これまでに金沢21世紀美術館、広島市現代美術館、福岡市美術館、北九州市立美術館などが対象となり、映像は各美術館にて展示された。

水晶やカードといった道具を使う、対象の情報が書かれた紙を手を持ち何かを感じると、対話しながら掘り下げるなど占いの方法は一つに定まらず、各々独自のアプローチによって美術館という一つの対象に迫っている。彼女らの話す内容は抽象的なものも多いが、何かを悟り確信したように話し始め、時にアドバイスをもたらす。その言葉から、何を得るかは占いを受けた受容者の手に委ねられているのだ。

このように映像では占い師たちが占いの結果を受容者たちに語りかけるが、映像の外側にいる私たち鑑賞者も占いの結果を受け止める受容者であるといえる。鑑賞者それぞれの占いに対する期待や解釈の違いが、美術館の未来の展望を見定める要素となるのかもしれない。(MK)

## アーティストプロフィール



### SECOND PLANET

福岡県在住の外田久雄(1959年福岡県出身)と宮川敬一(1961年福岡県出身)によって1994年に結成されたアーティストユニット。結成以来、様々な領域の人々とコラボレーションを行っており、映像、写真、音、インタビュー、テキスト、インターネット、絵画などを使用してインスタレーション、映像作品、オンラインプロジェクト等を制作している。



### 石丸 圭汰 KEITA ISHIMARU

1997年福岡県出身。佐賀大学地域デザイン研究科1年。絵画の制作を皮切りに、時にそれ以外のメディアや方法を応用しながら「風景」「接触」「視覚」へのアプローチを行う。



### 江越 未悠 MIYU EGOSHI

1998年佐賀県出身。佐賀大学芸術地域デザイン学部染色専攻4年。「人が何をどう感じるか」が興味の軸にあり、鑑賞者や参加者が作品と交流することによって生まれる感情から何かの気づきを得られるように取り組んでいる。染色ではなぜその素材でなければいけないのかの意味に注目して制作している。



### 松尾 匠 TAKUMI MATSUO

1999年福岡県出身。佐賀大学芸術地域デザイン学部日本画専攻4年。主に絵画の領域で、アニメキャラクターなどの既存イメージをテーマに制作している。



### 坂田 空 SORA SAKATA

1998年佐賀県生まれ(北海道出身)。佐賀大学芸術地域デザイン学部視覚伝達デザイン専攻3年。休学をきっかけに社会問題に興味を持ち作品にも影響される。なるだけ楽しい作品を作りたいと思っている。デザインしないデザイン専攻生。



### カドベヤ KADOBeya

佐賀大学芸術地域デザイン学部ミクストメディア専攻2年の宇野のどか(2000年大分県出身)と同学部有田セラミック専攻2年の川崎由梨子(2000年熊本県出身)のユニット。大学で出会い、今回初めて共同での制作を行う。ユニット名は作品イメージの「秘密の空間」と制作の拠点とした川崎の自室に由来する。

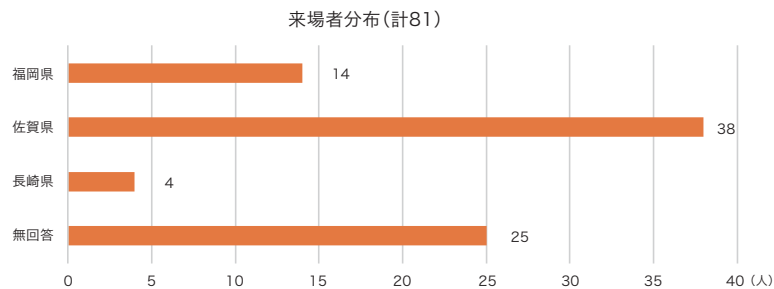
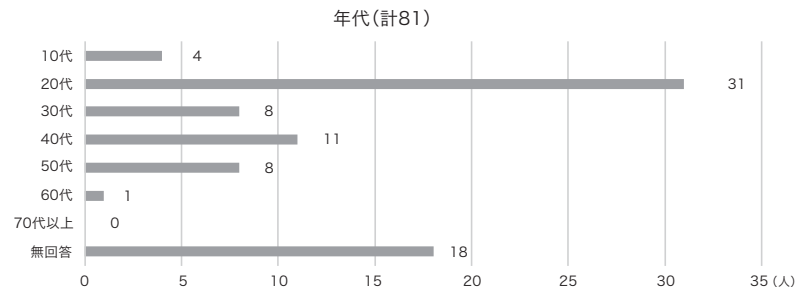
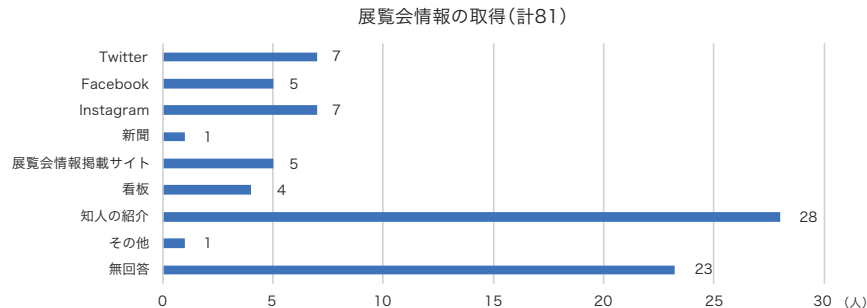


### 竹下綾香 AYAKA TAKESHITA

2001年佐賀県出身。佐賀大学芸術地域デザイン学部芸術表現コース1年。アクリル画を中心に「いつか何処かにあるかもしれないもの」「見えないけれどそこにあるもの」について制作を行う。自身の見た夢を形にすることが多い。



## アンケート集計結果



## WEB広報・メディア掲載



公式ホームページ



2020年11月10日(火)  
佐賀新聞「LIFE@佐賀新聞」面  
「アートプロジェクトの成果披露 14、15日 佐賀大学美術館」  
(花木美美)

コロナ禍という社会状況を踏まえ、本展では紙媒体の広報物を作成せず、WEBによる広報活動を行いました。

- 公式ホームページ  
「SMAART2020 美術と社会の時間」  
<https://smaart2020.wixsite.com/index>
- SNS  
Twitter @saga\_smaart2020  
Instagram @saga\_smaart2020  
Facebook @SMAART\_sagau
- 情報掲載一覧  
2020年11月1日 potari 告知記事「SMAART2020 美術と社会の時間」  
▷ <https://potari.jp/event/6412/> (2020年12月7日アクセス)  
2020年11月8日 fukuoka contemporary art BBS「SMAART2020 美術と社会の時間」  
▷ <https://6105.teacup.com/iaf/bbs/5457> (2020年12月9日アクセス)  
2020年11月9日 ARTNE(アルトネ)告知記事「SMAART2020 美術と社会の時間」  
▷ <https://artne.jp/event/1525> (2020年12月7日アクセス)

## ゲストアーティストより

コロナウィルスの影響でさまざまな環境が変化する中、8月以降オンラインで、佐賀大学の学生さん達とミーティングを続けてきたプロジェクト「美術と社会の時間」は11/14、15日の佐賀大学美術館での成果展で一応終了しました。学生の皆さんは、色彩、存在と不在、匿名性と暴力性、接触、流通するイメージ、そしてお味噌、と言った豊かな主題と、新しい方法を見つけ出し、それぞれのやり方で、社会に介入しようという心意気はとても新鮮でした。アートは何でもありなのです。どんなトピックでも、どんな素材でも、どんな方法でも、自分で選び、実践できる数少ない領域です。そしてアートの実践には失敗というものはありません。自分がやりたいことをもっともっとやってください。アートの旅は、これで終わりではありません。今後も、独自の視点で新しいアートの旅を続けてください。みなさんの今後の活躍を期待しております。

SECOND PLANET(美術家/外田久雄+宮川敬一)

## ディレクターメッセージ

アーティストにとってキュレーションとは必要だろうかという疑問がかねてからある。本展では特にキュレーションとは一体何かと考える場面に多く遭遇した。表現というアーティストの固有で不可侵なものへ介入することの難しさや、未確定な要素の多いマネジメントという仕事を経験し、私も含めてチーム内では少々の混乱があったように思えた。

事務的な作業が重視されがちなキュレーションにおいて自分の立場を明確にするには、一人ひとりが展覧会の趣旨を自分なりに整理しておくことは非常に重要である。これは表現を行う人に限った話でなく、キュレーションを行う人こそが考えを巡らせておかなければ、アーティストや鑑賞者との間で何も生まれない不毛な展覧会となってしまう。自分の考えを軸に誰かに何かを伝えたい、社会に対して何かを訴えたいという大きなエネルギーを持ち、それをアーティストと共に創り上げていくことこそ、キュレーションを行う意義が見いだせるのではないだろうか。本展の趣旨からキュレーションについて考えたこれらの思いを胸に今後の活動に取組んでいきたい。

小林愛恵(『SMAART2020 美術と社会の時間』ディレクター/佐賀大学大学院地域デザイン研究科)

## 美術にとって社会とは

実技系とキュレーション系、双方の学生の経験値を高めるべく、コロナ禍の状況の下、ホワイトキューブの外で何らかの表現を試みることを前提にグループ展を組んだ。アドバイザーとして公共の場での活動経験豊富なSECOND PLANETを迎え、オンライン・ミーティングを通じて実技学生たちのコンセプト面に関して多く助言いただいた。また実技学生それぞれにキュレーション学生を担当につけ準備を進めたが、キュレーション学生たちは作品制作のプロセスにどの程度踏込んで良いのか迷っていたようだ。

今回のテーマにある「社会」とは単にホワイトキューブの外というだけではない。作家とキュレーターの関係性、ゲスト作家や教員との関係性、大学組織の制度など、他者との協働や介入も含めての「社会」であった。実技学生、キュレーション学生とも思うようにならない他者の反応、法や制度とのせめぎ合いに苦勞していた。本展を通じて美術にとってホワイトキューブがいかに守られ恵まれた聖域であるかを認識できたと思うが、そこに安住することなくこれからも社会との関わりの中で美術の可能性を拡げていってほしい。

花田伸一(キュレーター/佐賀大学芸術地域デザイン学部准教授)

### 展覧会名

『SMAART2020 美術と社会の時間』

会期 2020年11月14日(土)～ 15日(日)

時間 10:00～ 17:00

会場 佐賀大学美術館 2階 小展示室(佐賀市本庄町1)

主催 佐賀大学芸術地域デザイン学部

### 企画・監修

花田伸一(キュレーター/佐賀大学芸術地域デザイン学部准教授)

### 助成

公益財団法人カメイ社会教育振興財団(仙海市)

公益財団法人日本教育公務員弘済会佐賀支部

公益財団法人金子財団

### ゲストアーティスト

SECOND PLANET(外田久雄+宮川敬一)

### 出品作家

石丸圭汰 江越未悠 松尾匠 坂田空

カドベヤ(宇野のどか+川崎由梨子) 竹下綾香

### マネジメント

ディレクター 小林愛恵

記録集 西森千晶、小林愛恵

会場レイアウト 井上菜々子

ハンドアウト作成 別府菜々子

ワークショップ運営 水本真弓

広報 安原彩絵、水本真弓

SNS運用 穴瀬聖、小河千夏

議事録 小野和美

ワークショップチラシデザイン 穴瀬聖、小河千夏

ハンドアウトデザイン 別府菜々子

ロゴデザイン 江副哲哉(あおいるデザイン)

### 記録集

『SMAART2020 美術と社会の時間』

発行 佐賀大学芸術地域デザイン学部

発行日 2020年12月31日

編集 小林愛恵

写真・デザイン 西森千晶

監修 花田伸一、江副哲哉(あおいるデザイン)

表紙デザイン 江副哲哉(あおいるデザイン)

印刷 株式会社グラフィック

©2020 佐賀大学芸術地域デザイン学部

不許複製・禁断転載

Printed in Japan All rights reserved

SMAART2020

# 美術と社会の時間

ART AND SOCIETY CLASS